

日者此作日誤大戴禮易本命篇亦作月然說文風字注云蟲八日而化與此合王充論衡商蟲篇同
今不徑改

〔和漢三才圖會五十二用須太〕久 蟲之聲也詩召南嘒嘒草蟲 啾啾蟲之小聲也

〔倭訓栞中編二十六〕半 〔むしえらみ 堀川帝の時より始る著聞集に見ゆ天寶遺事に每至秋時宮中

妃妾輩皆捉蟋蟀閉養小金龍中置枕函畔聞其聲庶民家皆効之と見えたり

〔禁秘御抄下〕虫

松虫鈴虫類人々進之或被召賀茂社司堀川院御時頭以下向嵯峨野誠有逍遙是給虫屋向選虫奉
之。

〔公事根源九月〕撰虫

是はあながち式ある事にはあらず殿上の逍遙とて殿上人どもあそびて嵯峨野などへむかひ
て虫を籠にえらび入て奉る是は堀川院の御ときよりはじまるおほよそ松むし鈴むしなどは
誰人も内裏に奉る又賀茂の社司などに仰せられてもめされけるとなん

〔世諺問答九月〕問て云此ごろ加茂籠とてむし入る事侍るは何のゆへに加茂より出侍るにか

答これは殿上の逍遙とてむかし殿上人どものさが野などへむかひてむしを籠にえらびいれ
てあそびてきみにたてまつりしは堀川院の御ときよりぞはじまりけるむしえらびとも申な

り中 〔むしれどむしには賀茂よりいで侍るとおもひあはせられ侍る

〔古今著聞集魚虫禽獸〕嘉保二年八月十二日殿上のおのこ共嵯峨野にむかつてむしを取て奉る

へまよしみことありありてむらごの糸にてかけたる虫の籠を下されたりければ貫首以下み
な左右馬寮の御馬にのりてむかひける藏人辨時範馬のうへにて題を奉りけり野徑尋虫とぞ
侍ける野中にいたりて僮僕をちらして虫をばとらせけり十餘町計はをのり馬よりをり歩